

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 9 月 23 日現在

機関番号：12606

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370129

研究課題名(和文)12世紀後半のプランタジネット朝美術に関する研究

 研究課題名(英文) A study on the art of the Plantagenet in the latter half of the 12th century,
mainly focused on the illuminations of the giant Bibles and the psalters

研究代表者

武井 美砂 (TAKEI, Misa)

東京藝術大学・美術学部・講師

研究者番号：10624877

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は11世紀後半から13世紀初頭に英仏両国で制作されたロマネスクの大型聖書本挿絵と詩篇序章挿絵の作例等を広く渉猟、検討することで、12世紀後半から13世紀初頭にかけて英仏両国で共有された美術の特質の一端を明らかにするものである。この時期、当該地域の図像数は増加傾向にあったが、その選択には一貫性が認められず、発展の道筋を捉えることはきわめて困難であった。しかし、仏カペー朝に婚姻という形式で深く分け入った英プランタジネット朝の妃たちのサークルに注目すると、いくつかの作例に共通する図像、プログラム、スタイルを見出すことができ、これらの作例が1200年様式生成への道筋も示していることが理解される。

研究成果の概要(英文)：This study has tried to reveal some specific feature of the art in the latter half of the 12th century in England and France mainly through the analysis of the illuminations of the giant Bibles, psalters and the other related works. At that time the numbers of the iconographies had generally increased while the choice for those found in every work had totally differed from one another so, it's very difficult to seize the general path to development. However, taking the circle of the Plantagenet women who married the Capetian kings and lords at that time into consideration, some common iconographies, programs and styles could be found in those works which were under the patronage of the Plantagenet women and also found such works had played main role to generate the year 1200 style.

研究分野：西洋美術史

キーワード：12世紀後半 プランタジネット朝 詩篇序章挿絵 大型聖書本挿絵 典礼劇 ロマネスク 1200年様式

1. 研究開始当初の背景

12世紀後半のイギリスとフランスの美術の関係はきわめて複雑である。フランスに定着していたノルマン人が1066年にイングランドに攻め込み、アングロ=サクソン朝を倒してノルマン朝を開いて以来、英仏海峡をめぐる影響関係はすでに捉えるのが難しくなっていたが、1154年にフランス・アンジュー家のアンリが、ヘンリー2世(在位1154~89)としてイングランドの王位を継承し、プランタジネット朝を開くと、状況はさらに複雑になった。ヘンリー2世は、その前々年までフランス・カペー朝ルイ7世(在位1137~80)の妃であり、フランス西南地域に広大な領土を持つアリエノール・ダキテーヌ(1122~1205)を妃として連れてきたからである。ここからアリエノールが亡くなり、ジョン欠地王(在位1199-1216)が母から受け継いだフランスの領土をすべて失う1209年までの約50年間は、イギリス側からもフランス側からも一面的には捉えることのできない「プランタジネット朝美術」が展開することになる。筆者がこれまで研究してきたイギリス・ロマネスク美術を代表する大型聖書本《ウィンチェスター聖書》(Winchester Cathedral Library, Ms. 17)の挿絵もちょうどこの時期の美術に該当する。

2. 研究の目的

そこで本研究では、《ウィンチェスター聖書》を含む11世紀後半から12世紀後半にかけて英仏のプランタジネット朝領土とその近隣地域で制作されたロマネスクの大型聖書本の挿絵を可能なかぎり収集・分析し、これらの聖書本と影響関係を持ちながら発展したと考えられる11世紀後半から13世紀にかけて英仏両国で盛んに制作されるようになった詩編本序章挿絵の分析とを重ね合わせることで、イギリスともフランスともつかないために従来研究から抜け落ちてきた12世紀後半から13世紀初頭にかけて英仏両国で展開したこの「プランタジネット朝美術」について新たな知見を得ることを目的としたものである。

3. 研究の方法

- 1) 研究基盤の整備(図版の収集、作品データの整理、文献の収集、現地調査)
- 2) 11世紀後半から13世紀初頭に英仏で制作された詩編本の序章挿絵の分析
- 3) 本研究を補強する並行事例の研究
- 4) 11世紀後半から12世紀後半のプランタジネット朝領土内、および近隣地域で制作されたロマネスクの大型聖書本の挿絵分析

4. 研究成果

1) 研究基盤の整備

11世紀後半から13世紀初頭に英仏プランタジネット朝領土とその近隣地域で制作されたロマネスクの大型聖書本(35作品、約

900挿絵) 詩篇本序章挿絵(15作品、約300挿絵)の図版を収集し、作品データを整理し、関連文献を収集した。またプランタジネット朝領土内とその近隣地域を出来る限り踏査し、本研究の研究基盤を整備した。現地調査を行ったのは以下の通りである。ロワール地方(シノン、フォントヴロー、ル・マン、トゥール、ブルジュ)、ノルマンディー地方(ルーアン、カーン、バイユー)、ポワティエ地方(ポワティエ、ショーヴィニー、サン・サヴァン、モンモリヨン、アングレーム)、シャンパーニュ地方(トロワ)、ブルゴーニュ地方(オーセール、ヴェズレー、ソーミュール、オートン)

2) 詩篇本序章挿絵の分析

11世紀後半から13世紀初頭にかけて英仏両国で盛んに制作された詩篇本の序章挿絵は、旧約・新約図像を備えたピクチャー・ブックの様相を呈している。本研究ではその中から「十字架降下」にまずは注目し、分析に着手した。「十字架降下」図像は11世紀までのビザンティン世界において活発に形成されたが、西ヨーロッパにも北フランスを中心に古くからこの図像の伝統は存在した。今回収集した英仏詩篇本の図像にもこれら双方の伝統が見出されたが、この図像を含む英仏詩篇本の作例数自体は、この時期、まだ比較的少ないことが明らかとなった。

そこで同時代同地域の他媒体の作例も加えて考察を行ったところ、そこには図像の形だけではなく、この図像を含む『キリスト受難伝、復活伝』のプログラム全体にある程度の共通する骨格が認められることが想定された。それらの作例は、イギリスの《聖オーバンス詩篇》(c.1119-45)と《ウィンチェスター詩篇》(c.1150)を起点とし、シャルトル大聖堂西正面ステンドグラス(c.1150)、《ライデン詩篇》(c.1190-1200)、《ミュンヘン詩篇》(c.1200-1210)およびその後続作例、《インゲボルグ詩篇》(c.1200)、《カスティュー・ド・ブランシュ詩篇》(c.1225)、サント・シャペルのステンドグラス(c.1245)へと連なっていく作品群である。これらの作例に共通する点は、「十字架降下」図像を含むこと、『キリスト受難伝、復活伝』において2つの図像をセットとする画面形式を備えていること(二段組もしくはメダイオン形式を持ち、そこに選ばれる2つの図像セットの多くが共通している)、さらに「エマオ」の一連の図像を含むこと等である。

そこでこれらの作例の制作背景を調べてみると、最初の2作例をのぞくと、何れの作例においても12世紀後半から13世紀にかけて英仏両国で活躍したプランタジネット朝の妃たちとその近親者のサークルが関わっていることが明らかとなった。それらの人々とは、ヨーク司教ジェフリー・プランタジネット、プランタジネット朝ジョン王妃アヴィス、カペー朝フィリップ・オーギュスト妃イ

ンゲボルグ(アリエノール・ダキテーヌの妹の支援を受けていた)カペー朝ルイ8世妃ブランシュ・ド・カスティューク(アリエノール・ダキテーヌの孫娘)等である。

以上のことを考え合わせると、当該時期の英仏両国においては『キリスト受難伝、復活伝』についてある一定の図像およびプログラムが共有されていた可能性が高く、それらはプランタジネット朝の女性たちとその近親者のサークルによって担われていたのではないかと考えられた。(この基礎調査の一部は雑誌論文1に掲載。)

次にこれらの作品群の『キリスト幼児伝』について検討を行うと、ここでは一連の「マギ」の図像が好んで取り上げられていることが分かり、特に「星に導かれるマギ」の図像の形に共通するものがあることが分かった。この図像はおそらくルーアンの「降誕劇」のテキストを反映したものであり、このことを例証する新たな比較作例としてルーアン近郊のプティ＝ケヴィイー、サン・ジュリアン教会堂内陣穹窿壁画を見出すことができた。

このサン・ジュリアン教会堂は1160年にプランタジネット朝ヘンリー2世と妃アリエノール・ダキテーヌによって自領の狩猟場近くのマナーハウスに建てられたプライベートな礼拝堂である。その内陣穹窿を飾る壁画は一連の「マギ」図像を中心とした「受胎告知」から「洗礼」までの『キリスト幼児伝』であり、それらの図像は10個のメダイヨン中に描かれている。ここに見られる図像はルーアンの「降誕劇」を反映したものであるとされており、それらの図像はプランタジネット朝の妃たちとその近親者のサークルに由来する上述の詩篇本序章挿絵の作品群のものときわめて類似していることが明らかとなった。

3) 並行事例の研究

ここでは詩篇本序章挿絵の分析で明らかとなった12世紀後半の英仏美術の一体性を傍証する並行事例を見出すことに努めた。

着目したのは『黙示録』作品である。特に12世紀後半にはプランタジネット朝領土内に位置することとなったサン・サヴァン教会堂の『黙示録』図像を取り上げ、ここに見られる伝統と13世紀半ばに英仏両国で集中的に制作されることになるアングロ＝ノルマン黙示録の作品群との繋がりについて検討した。

その結果、例えばサン＝サヴァンの「蝗の禍」は、アングロ＝ノルマン黙示録では《トリニティ黙示録》との繋がりが強く、図像の細部を通じては《道德聖書トレド本》にも繋がっていることが明らかとなった。《トリニティ黙示録》はプランタジネット朝エドワード1世(アリエノール・ダキテーヌの曾孫)の結婚に際し、カスティリア王国レオノール(アリエノール・ダキテーヌの娘の曾孫)がイングランドにもたらしたものである可能

性が指摘されている。《道德聖書：トレド本》は聖王ルイの教育用に母ブランシュ・ド・カスティューク(アリエノール・ダキテーヌの孫娘)が制作させたものであり、何れもプランタジネット朝の血縁を通じて図像伝統が伝播している諸相が伺える結果となった。

一方、サン＝サヴァンに見られる「再臨のキリスト(最後の審判)」は、《トリニティ黙示録》に繋がりを見出したものの、他のアングロ＝ノルマン黙示録には後継を見出せなかった。しかし「両手を広げるキリスト像に十字架を重ねる」という図像の組み合わせに着目し、アングロ＝ノルマン黙示録以外の作例にも目を向けると、そこには夥しい数の作品群を見出すこととなった。それらは例えば、コンク、ポーリュウ、サン＝ドニ、パリ、ポワティエなどの大聖堂入口のタンパン彫刻であり、イングランドの《ベリー福音書》、《ウィンチェスター詩篇》、《ウィンチェスター聖書》などの写本挿絵である。何れも12世紀前半から13世紀初頭にかけてアキテーヌ公国、英プランタジネット朝、仏カペー朝の領土内において一斉に制作されたものであり、ここにもやはりアキテーヌ公国のアリエノール・ダキテーヌを起点とする3世代あまりの英仏両国の美術に看過できない一体性が保持されていたことが考えられる結果となった。その一体性の背景にはプランタジネット朝の妃たちとその近親者のサークルの存在がやはり浮かび上がるのである。(図書1に掲載。)

『黙示録』図像の研究に付随して、10世紀までにイングランドのアングロ＝サクソン美術において生成されたと考えられる「地獄の口 hell mouth」図像の伝播と発展の諸相についても考察した。1100年頃から大陸の諸作例に見出されるようになる「地獄の口」図像は、主に「最後の審判」、「キリストの冥府下り」、「黙示録」の各地獄のコンテキストにおいて用いられたが、その図像の形は「飲み込まれる口」(水平方向へ開く)、「落ちていく口」(垂直方向へ開く)、「逃れられない口」(全方位へ複数の口が組み合わせられる)と実に奔放な発展を遂げていく。英仏の詩篇本序章挿絵や大型聖書本はもとより、サント・シャペルやブルジュ大聖堂のステンドグラスおよび彫刻、オータン大聖堂の彫刻のように、カペー朝の領土に深く分け入って伝播している一方で、アングロ＝ノルマン黙示録の諸作例において再び豊かに発展を遂げるなど、英仏両国を軽々と行き来する本図像の様子が観察された。同様のことは、キリストの足のみが雲の下に見える同じくアングロ・サクソン美術由来の「キリストの昇天」図像についても観察された。

4) ロマネスクの大型聖書本の挿絵分析

11世紀後半から13世紀初頭にかけてプランタジネット朝領土内とその近隣地域で制作されたロマネスクの大型聖書本挿絵は、一

見、どの作例もバラバラで孤立しているように見える。しかし、イングランドとフランス南西部、中部、および東部で制作された聖書本については、地理的にかなり離れているにも関わらず、いくつかの図像、様式上の共通点を見出すことができる。これらの類似は従来、ビザンティン美術の影響による並行現象としてのみ理解されてきたが、各々の作例の制作背景を調べてみると、そこには詩篇本序章挿絵と同様、アリエノール・ダキテーヌ周辺を起点とする地縁・血縁による繋がりが少なからず想定された。それらの作例は、《ルドン聖書》(11世紀後半?)《サン・マルシャル・リモージュ第2聖書》、《トロワ聖書》、《シャルトル聖書》、《クレルモン・フェラン聖書》、《スーヴィニー聖書》、《ブルジュ聖書》、《フレサック聖書》、《ポンティニー聖書》、《マネリウス聖書》などである。この中でも12世紀後半の作品群はイングランドの聖書本と併せて「1200年様式」に向かうさまざまな発展の段階を示しており、12世紀後半の「プランタジネット朝美術」の1つの到達点が「1200年様式」であったのではないかとした筆者の本研究当初の仮説はある程度まで具体的に確認されたと考える。

2)と4)の成果については、平成28年度中に取りまとめ、順次発表していきたいと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

1. 武井美砂「東京芸術大学図書館所蔵・中世写本ファクシミリ研究：《インゲボルグ詩篇》」*Aspects of Problems in Western Art History*(東京芸術大学西洋美術史研究室紀要)vol.12, (2014) pp.86-90 (査読あり)

〔図書〕(計 1 件)

1. 田中久美子、越宏一、佐竹明、加藤磨珠枝、濱西雅子、保坂ひろみ、ペーター・K・クライン、宮内ふじ乃、安發和彰、武井美砂、高木真貴子、大野松彦、高野偵子、荒木成子、青山愛香『黙示録の美術(ヨーロッパ中世美術論集2)』(越宏一監修、田中久美子編集)竹林舎 2016. 2, 429p.(共著、担当箇所「サン・サヴァン・シュル・ガルタンブ修道院付属教会堂の黙示録図像再考 「蝗の禍」「女と龍」「再臨のキリスト」をめぐって」 pp.197-223)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕
ホームページ等 なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

武井美砂 (TAKEI Misa)
東京芸術大学・美術学部・講師
研究者番号：10624877

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：